

## 第二言語習得における語彙力の評価方法

佐藤 正伸

### Assessment of Lexical Competence in Second Language Acquisition

Masanobu Sato

#### ■ Abstract

With more vocabulary there will be more comprehension, and with more comprehension there will be more acquisition (Krashen & Terrell, 1983). Hence, putting the focus of teaching on helping students develop lexical competence is critically important. Lexical competence is often defined in terms of vocabulary size (breath) and its usage (depth). This study addresses the question of how to measure lexical competence thus defined, and aim at examining some possible ways of measuring Japanese learners' lexical competence in English.

キーワード：語彙力、語彙測定テスト、語彙の深さ、語彙の幅、コーパス

#### はじめに

語彙力があれば理解が高まり、理解が高まれば第二言語習得は進むといわれる (Krashen & Terrell, 1983)。語彙力は英語力の要であるということについて異論を唱える者はいないだろうが、それを評価しようとするれば容易では

ない。実際に語彙力を測定しようとするれば、語彙力とは何かが定義されなければならないが、本稿では、語彙の大きさ（サイズ）と個々の語の使用可能性の2つが語彙力を定義する際の鍵であるという立場を採用する（Vermeer, 2001）。Vermeer（2001）は、それぞれを「breath（幅）」と「depth（深さ）」と呼んでいる。問題は、語彙力を測定するのにどういうテストが用いられているかである。第二言語の語彙の習得に関する研究は多数あるが、語彙力をどういうテストで測定しているかについての調査はない。そこで、本稿では、語彙力を測定する方法について、これまで提案されてきたものも含め、どういうテストが可能かについて検討する。

### 可能な語彙テスト

語彙テストといえば、通常は、(1)語と意味とのマッチングを行う、(2)文を完成させるために空所を補充する、あるいは(3)当該の語に対して母語で意味を書く、というやり方が主流であり、(1)と(2)は TOEIC、TOEFL、英検といった標準テストにおいて広く使われている。しかし、コミュニケーション重視の外国語教育（communicative approach）の台頭によって、こうした語彙テストの妥当性の再検討がなされるようになった（Read, 2000）。また、コーパス言語学（corpus linguistics）の研究によって、言語の使用実態をデータ（頻度情報、連語情報、口語と文語の文体情報など）として捉えることができるようになり、何をどういう形で語彙テストに入れるかということが議論されるようになってきている。そうした議論の流れを踏まえ、以下では、具体的にどういう語彙テストが可能性あるかについて、(1)頻度情報を利用したテスト、(2)話題領域に注目したテスト、(3)動詞の概念ネットワークテスト、(4)クローズテスト、(5)連想によるテスト、(6)基本語語彙選択力テスト、(7)熟知度テストの7つを見ていくことにする。

#### 1. 頻度情報を利用したテスト

現存する語彙測定テストとしてよく知られているのは Paul Nation と Batia

Laufer (Laufer & Nation, 1995, 1999) が開発した Vocabulary Levels Test (VLT) である。これはコーパスの頻度情報を利用して、1000 語レベル、2000 語レベルから 10000 語レベルまでを想定したテストである。例えば、以下は 1000 語レベルのテストの例である (Nation, 1993)。

**The Vocabulary Levels Test (1000 words level 1.)**

1. I'm glad we had this opp \_\_\_\_\_ to talk.
2. There are a doz \_\_\_\_\_ eggs in the basket.
3. Every working person must pay income t \_\_\_\_\_.
4. The pirates buried the trea \_\_\_\_\_ on a desert island.

これは、Version 1 テストと呼ばれるもので、opp- に続く文字を入れて、opportunity を書き上げるというものである。しかし、これは、使用頻度の情報に基づいて 1000 語のバンドを作成し、その中から 15 問程度の説明を作成するというものであり、語彙力の何を測定しているのかははっきりしない。1000 語の母集団から 15 問のサンプルを抽出したとき、サンプルの表象性(どの程度母集団を代表しているか)という問題が出てくる。また、単語の多くは多義語であるが、その多義性についての考慮がなされていない。しかし、これは、学習者個々人の単語力を簡易な方法で知る上では有用であり、いくつかの翻訳版も出ている。

## 2. 話題領域に注目したテスト

日本人のための語彙テストとして、「語彙の幅(拡張語力)」を測定するについては、以下のように、話題を決め、そこで使われる語をレベル的に調整し、出題するというものが考えられる。以下は、単純な形式(英単語を日本語の対応語で示すというやり方と日本語を英単語で示すというやり方)ではあるが、話題と語彙のサイズに注目したテスト例である。想定するのは英検でいえば、準1級レベルである。

**A. 英語→日本語版：環境用語**

指示：以下の英語表現はどのようなことを意味しているのだろうか。分からない場合はヒントを参照してもよい。ただし、ヒントを使用した場合は、減点の対象にする。

- ・ global warming      ・ biodiversity      ・ environmental protection
- ・ power saving      ・ sustainability      ・ reduction
- ・ climate change      ・ acid rain      ・ species diversity      ・ greenhouse gas

**ヒント** 節電、持続可能性、地球温暖化、温室効果ガス、生物多様性、酸性雨、気候変動、削減、種の多様性

**B. 日本語→英語版：資源**

指示：以下の日本語表現に当たる英語は何かいってみよう。分からない場合は、ヒントを参照してもよい。

- ・ 水資源    ・ 地下水    ・ 水道水    ・ 鉱物資源    ・ 採掘    ・ 化石燃料
- ・ 原油    ・ 森林資源    ・ 伐採    ・ 海洋資源

**ヒント** : felling, fossil fuel, forest resources, water resources, groundwater, crude oil, mining, tap water, marine resources, mineral resources

これは筆者が試みに作成したものだが、話題に関してのいわゆる専門用語についての知識をチェックする上では有効である。特に、英語授業の一環として、あるテーマを扱った課の学習が終わった時点で、話題に関連した生徒の語彙力を教室内でチェックするには簡便な方法である。しかし、日英語のマッチングができたからといって、実際にこれらの用語を使うことができるかどうかは定かではない。

さらに、精度を高めたテストを開発するにあたり、Chung & Nation (2003 : 105) は専門分野の解剖学 (anatomy) のテキスト分析をする際に、以下のよう  
に4つの段階を踏むことが必要であると提案している。なお、どの語がど  
の段階に属するかというレベル判定の妥当性をチェックする必要があるが、こ  
うした専門用語を取り扱う場合には、可能な限り専門家の判断を求める必要  
がある。

第一段階：解剖学には意味的に関係のない語：the, is, between, amounts, common,  
directly

第二段階：解剖学に若干関連のある語：superior, part, forms, pairs

第三段階：解剖学に関連があるが同時に一般的にも使う語：chest, trunk,  
neck, ribs, breast

第四段階：解剖学に固有の専門語：thorax, sternum, costal, pectoral, fascia

この語彙分析を具体的にどういう形でテストに生かすかについては、  
Chung & Nation (2003) は議論していないが、学習者が関心を持つ専門分野  
の語彙を整理する上では十分に考慮する価値のある提案だと考える。しか  
し、これも結局は「語彙リスト」に終わる可能性があり、第四段階の語彙を  
どのように話題ネットワーク化するかが課題として残る。ここでいう話題  
ネットワークとは、「株」「選挙」「砂漠化」「エネルギー問題」などの特定の  
話題について、それに関連する語句をネットワークするやり方である。例え  
ば「政治」であれば、「国会審議」や「政治的立場」などに分け関連語を配  
置していくという方法が考えられる。

「国会審議」関連語

policy debate 政策論争 / agenda 議題 / political donation 政治献金 / political ethics 政治倫理 / political negotiation 政治折衝 / policy 政策 / bill 法案 / comfortable majority 安定多数 / Diet 国会 / Diet deliberations 国会審議 / floor 議場 / steamrolling 強行採決 / carte blanche 白紙委任 / filibuster 議事妨害

「政治的立場」関連語

political party 政党 / faction 派閥 / ruling party 与党 / opposition party 野党 / rightwing 右派 / leftwing 左派 / party platform 政党綱領 / hard line 強硬路線

このように政治関連語を「国会審議」「政治的立場」「選挙」といったカテゴリーに分類しそれぞれに該当する用語を配置することで、話題別ネットワークを作りあげることができよう。そして、話題ネットワークを念頭に、例えば政治領域であれば、それぞれのカテゴリーについての語彙力を問うというテストが考えられよう。

3. 動詞の概念ネットワークテスト

次に、動詞の概念ネットワークという観点から日本人のためのテストを作成すると、以下が考えられる。なお、以下では状況を示すための和訳を付けているが、和訳がなくても状況的な曖昧性が解消できる場合は、学習者の英語レベルを調整する変数として和訳の有無を考慮することもできる。

### 3.1 語彙選択問題

指示：英文を完成するのに適切な動詞を選び、文法的に正しい形に変えてカッコに記入しなさい。以下は、2つの概念領域（「結合」と「消失」）を取り上げる。

結合「つなぐ、つながる、まとめる」[link, combine, unite, relate, associate]

1. This problem is closely (linked) with the accident.

この問題はその事故と密接に結びついている。

2. He was able to (combine) business with pleasure.

彼は仕事と楽しみを一緒にすることができた。

The death of the leader (united) the whole party.

リーダーの死が全党を結束させた。

People (associate) Switzerland with the Alps.

人はスイスというとアルプスを連想する。

Earthquakes are (related) to continental plate movements.

地震は大陸プレートの動きと関連がある。

消失「なくなる」[decline, exhaust, fade, vanish, wither]

1. The noise of the plane (faded) away. 飛行機の騒音が消えていった。

2. The flowers (withered) because I forgot to water them.

私が水をやり忘れたせいで花がしおれた。

3. The birds (vanished) from sight. 鳥たちは視界から消えた。

4. His influence has begun to (decline) recently.

彼の影響力は最近衰えてきている。

5. I was (exhausted) by the hard training. きつい練習でくたくたになった。

これは話題別というより概念別に動詞を整理し、その上で、概念内の類義語の使い分けができるかどうかを問うものである。概念ネットワークは語彙

テストを考える上で重要なコンセプトであり、可能性を秘めたテストといえるが、いくつの概念ネットワークがあれば動詞領域を記述できるのか、といった基礎理論的な問題が残る。動詞領域の概念記述については、今後の研究を俟ちたい。

#### 4. クローズテスト

以前からクローズ (cloze) テストは妥当性の高いテストとされ、今でも語彙力などの測定方法として広く使われているテストである (Oller, 1972)。どういう基準で穴埋めを作成するか、選択肢を設けるか否かについての違いはあるが、基本的な形式は以下のとおりである。

There will be more extremely hot days with temperatures [6] (1. declining 2. shifting 3. exceeding) 35 degrees this summer. There are several ways you can [7] (1. protect 2. maintain 3. work) yourself when it gets very hot outside. One way is to avoid hard physical activity until the sun goes down. In addition, it is a good idea to wear lightweight and light-colored [8] (1. jacket 2. clothing 3. sweater). It is also important to drink a lot of water [9] (1. throughout 2. for 3. in) the day so you don't get dehydrated. Finally, try to stay in the shade or in air-conditioned places. You can [10] (1. save 2. prevent 3. exhaust) from getting heat stroke if you take these basic precautions.

語は文脈の中で使われ、文脈の中で意味を成す。前後関係を読みながら、適切な語を選択する力を見るクローズテストは、いわゆる母語 (NL) と対象言語 (TL) のマッチングといった試験よりも実際の言語使用を反映しているといえる。これは基本動詞や前置詞といった基本語についても作成することができる。その際に、できるだけ実際に使用される英語の中で使用を見ることがよい。以下は、映画 CASABLANCA の場面を使った、クローズテストの例である。



映画 CASABLANCA

場面1：リックがイボンヌに誘われる

Yvonne: Where (were) you last night?

Rick: That's so long ago, I don't (remember).

Yvonne: Will I (see) you tonight?

Rick: I never (make) plans that far ahead.

イボンヌ：昨夜はどこにいたの？リック：そんな昔のこと憶えていない。

イボンヌ：今夜、会えるかしら？リック：そんな先の予定は立てない。

場面2：シャンパングラスをもったリックがサムとイルザに向かって

Rick: Now, Henri wants us to finish this bottle and then three more. He (says) he'll water his garden (with) champagne before he'll let the Germans drink it,

Sam: Huh! This sort of (takes) the sting (out) of being occupied, doesn't it, Mr. Richard?

Rick: You (said) it. Here's (looking) at you, kid.

リック：アンリは私たちにこのボトルを空けて、あと3本飲みほしてしまっ  
て欲しいんだと。ドイツ人に飲まれる前に、庭にシャンペンで水やり  
をするといていた。

サム：ほっ。ボトルをあければ、占領された痛みから解き放されるん  
で  
すかね。リチャードさん。

リック：その通りさ。（イルザに）君の瞳に乾杯。

## 5. 連想によるテスト

また、語彙の深さを診る興味深いテストとしては、連想力を利用するテストが数多くの研究者によって提案されている（Read, 1998; Bogaards, 2000; Gredidanus, Beks & Wakely, 2005）。Read (2000: 181) は、ある刺激語と一連の語を提示し、刺激語と関連する語と無関係な語を選ばせるテストを想定し

ている。以下がその例である。

**刺激語**：edit

連想語 {arithmetic, film, pole, publishing, revise, risk, surface, text, team, sport, alternative, chalk, ear, group, orbit, abstract, scientists, sport, together, and more}

Read (2000) によれば、意味の関連を見出す際に、ここでは3通りがあるという。

1. Paradigmatic：意味的類似性

edit - revise, abstract - summary, assent - agreement, adjust - modify.

2. Syntagmatic：連語性

edit - film, team - sport, abstract - concept, occur - phenomenon.

3. Analytic：部分—全体の関係のように分析的になんらかの関係があるもの

team - together, edit - publishing, electron - tiny, export - overseas

ここで下線を引いた関係が edit を刺激語とした連想テストの結果から引き出されるが、さらに edit - revise、edit - film、team - together などを使って文を作るというところまでいけば、語彙の使用に関する力を測定するテストとなるだろう。連想を使ったテストを拡張語力に応用する場合、ある刺激語を与え、どれだけ豊かな連想項目を産出できるかで語彙力を測定することができる。例えば、"dentist" (歯科医) からは次のような簡単な連想が得られよう。

**刺激語**：dentist

連想語：tooth, ouch, doctor, office, hurt, teeth, drill, pain, cavity, toothache, filling …

これは単純な連想だが、連想の深さと幅を3つ、あるいは5つのレベルで見えていくことができよう。ここで得られた連想語が level 1 だとすれば、こうした基本単語からさらに展開させ、{surgery, parlor, guttural, filling, hygiene,

gum, cast, X-ray} といった語が得られれば level-2 となる。また、例えば hygiene から {sanitation, prevention, anatomy, treatment} といった語句が連想されると level 3 とみなすことができる。このレベル設定は、テスト作成者の直観によるところが多いが、その直観の妥当性を高めるため、該当する分野の専門家の意見を求めるとか、頻度情報などを用いる必要があるだろう。連想の幅と深さの度合いで、語彙力を測定するという方法である。語彙力テストとして、学習者の関心の所在に合わせて、刺激語を選び、自由連想あるいは統制した連想（Aの部分、Aの属性など連想内容を限定した連想）を求めることが考えられる。時間を2分といった具合に決めて、どれだけの数の連想語が、そして、どれだけ豊かな連想語が産出されたかをみるのも可能性のあるテストである。連想を使って語彙力を測定するという方法には大きな可能性がある。

## 6. 基本語語彙選択テスト

語彙力には「使い分ける力」、すなわち差異化力が求められる。この差異化力を測定する簡易な方法は以下である。

指示：see と look のいずれかを入れなさい。

1-1. 外で何が起きているかみてみよう。

(Look) and (see) what's going on outside.

1-2. 卵がかえるのを見たことがありますか。

Have you (seen) an egg hatch?

1-3. 彼と付き合っているの。

I'm (seeing) him.

1-4. ジョンはしあわせそうだ。

John (looks) happy.

1-5. 何度も何度も見たけど、他には何も見えなかった。

I (looked at) it over and over again, but didn't (see) anything else.

ここでは状況を示し、look と see のいずれを使うのが適切かを問うことがポイントである。同様に listen と hear の使い分けテストも、以下のように作成することができる。

指示：listen と hear のいずれかを、文脈に合った形にして空所に入れなさい。

2-1. 君の聞き間違えだよ。

You (heard) me wrong.

2-2. 注意して聞いたが、何も聞こえなかった。

I (listened) hard, but I didn't (hear) anything.

2-3. 若い頃、ラジオばかり聞いていたものだ。

When I was young, I'd (listen to) the radio.

2-4. 聞こえた？

Did you (hear) me?

2-5. 話を聞いて。

Now, (listen to) me.

ここでは、基本動詞の使い分けに注目したテスト案を示したが、この方式は形容詞、副詞など幅広く応用が利くはずである。類義語を使い分けることは英語力の鍵であり、そのためのよりよいテスト開発が求められる。語彙力は使い分ける力だけで充足しない。個々の語を使い切る力（depthに関するもの）も同時に見ていく必要がある。使い切りの力を見るテストとしては、以下のように3つの異なった状況を示して、共通の動詞を入れさせる多義語テストが考えられよう。

A. 以下の状況を英語で表現する場合、共通して入る動詞を入れなさい。

1. 猫を外に出して。 共通の動詞：( )
2. 82円切手を封筒に貼りなさい。
3. 手紙を封筒に入れて。

解答：PUT (Put the cat out./ Put an 82-yen stamp on the envelope./Put a letter in the envelope.)

B. 以下の状況を英語で表現する場合、共通して入る動詞を入れなさい。

1. 体温を測りましょう。 共通の動詞：( )
2. 風邪薬飲んだ？
3. もう我慢できない。

解答：TAKE (Let me take your temperature./Have you taken your cold medicine? / I can't take it anymore.)

## 7. 熟知度テスト

興味深い試みとして、Paribakht & Wesche (1997) は、Vocabulary Knowledge Scale (VKS) を提案している。基本的には多読を通して、付随的に語彙を習得する状況を想定した尺度であり、ある語句に対して「この語をこれまでに見た覚えがない」から「この語を文で使うことができる」までの6ポイントの尺度である。

The Vocabulary Knowledge Scale from Wesche and Paribakht (1993)

- I. I don't remember having seen this word before.
- II. I have seen this word before but I don't know what it means.
- III. I have seen this word before and I think it means \_\_\_\_\_ (synonym or translation)
- IV. I know this word. It means \_\_\_\_\_ (synonym or translation)
- V. I can use this word in a sentence: e.g., \_\_\_\_\_

多読と語彙力の関係が議論される中、それをどうやって測定するかが論点であった。このモデルは、多読教材の注目したい語（句）を選び、その語の習熟度を見ることで、多読の量と習熟度の関係を探る可能性を秘めている。ただ、具体的にどのように使用するかについては、今後の検討を要する。

おわりに

本稿では、語彙力測定の手法について代表的なものを取り上げ、筆者の見解も含めながら、語彙テストの「現在」について検討してきた。語彙力（語彙を使い分け、使い切る力）を測定する妥当性の高いテストは未だ存在しないが、いくつかの可能性の高いアイデアが提案されているのは確かである。そうしたアイデアを具現化する際に、コーパス言語学の手法を利用することが必要であろう。すなわち、テスト開発では語彙テストでどのような項目を選ぶか。その際の基準は何かという問題が出てくるが、そこで有効なのがコーパス言語学の手法である。今では、現代英語を反映する大型のコーパスが整備されており、それを利用することで、どのような分野（ジャンル）ではどのような動詞が使われる傾向にあるか、同じ動詞でも分野が異なるとどのような語義で使われるかなどを明らかにすることができる。例えば、Biber (2006) は大学での講義と使用教科書の本格的な分析をコーパス言語学の手法で行い、講義と教科書英語の違いは何かについて、語彙、文体などの観点から考察を行った。その結果、講義では、thing、say、get、see、take といった基本語が頻繁に使われ、教科書では globalization、enhancement、highlight といった言葉が目立つという指摘を行っている。こうした研究が進めば、領域・分野別に、口語と文章で使う語と表現のしかたのようなものが明らかになり、そうした知見をテスト開発に生かすことで、語彙力を反映するテストを作成することができるだろう。評価方法のみならず、エクササイズも語彙指導の在り方に大きな影響を与える。そこで、今後は、どのようなエクササイズを作成するか、そして、語彙力の評価をどうするかを両輪として研究を進めていくことが必要であると筆者は考える。

参考文献

- Biber, D. (2006). *University language: A corpus-based study of spoken and written registers* (Vol. 23). John Benjamins Publishing.
- Bogaards, P. (2000). Testing L2 vocabulary knowledge at a high level: The case of the Euralex French Tests. *Applied Linguistics*, 21(4), 490-516.
- Chung, T. M., & Nation, P. (2003). Technical vocabulary in specialized texts. *Reading in a foreign language*, 15(2), 103.
- Gredidanus, T., Beks, B. & Wakely, R. (2005). Testing the development of French word knowledge by advanced Dutch and English speaking learners and native speakers. *Modern Language Journal*, 85, 221-233.
- Krashen, S. & Terrell, S. (1983). *The Natural Approach: Language Acquisition in the Classroom*. New York: Pergamon.
- Laufer, B., & Nation, P. (1995). Vocabulary size and use: Lexical richness in L2 written production. *Applied linguistics*, 16(3), 307-322.
- Laufer, B., & Nation, P. (1999). A vocabulary-size test of controlled productive ability. *Language testing*, 16(1), 33-51.
- Nation, P. (1993). Measuring readiness for simplified reading: A test of the first 1000 words of English. *RELC*, 31, 193-203.
- Oller, J. (1972). Some methods and difficulty levels for cloze tests of proficiency level in English as a second language. *Modern Language Journal*, 56, 151-171.
- Paribakht, T. S., & Wesche, M. B. (1993). Reading comprehension and second language development in a comprehension-based ESL program. *TESL Canada journal*, 11, 9-29.
- Paribakht, T. & Wesche, M. (1997). Vocabulary enhancement activities and reading for meaning in second language vocabulary acquisition. In J. Coady & T. Huckin (Eds.), *Second language vocabulary acquisition*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Read, J. (1998). Validating a test to measure depth of vocabulary knowledge. In A. Kuunan (Ed.), *Validation in language assessment*. Mahwa, NJ: Earlbaum, pp. 41-60.
- Read, J. (2000). *Assessing vocabulary*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Vermeer, A. (2001). Breadth and depth of vocabulary in relation to L1/L2 acquisition and

佐藤 正伸「第二言語習得における語彙力の評価方法」

frequency of input. *Applied psycholinguistics*, 22(02), 217-234.